

ひきセン通信 2019 第4号

ひきセン通信は新潟市ひきこもり相談支援センターが発行する不定期刊行物です

「ひきこもり相談支援センター
支援のあれこれ」

ひきセンの役割は、外出の機会がなく家で孤立している状態からの解消にあります。そのための方法として相談・訪問・居場所が主な支援となりますが、それだけではひきこもり状態の解消に行きつかない場合も多くあります。そんな時はどうするか、一つの例を紹介します。

不登校からひきこもりの状態が10年以上。学校と言う世界になじめず自分なりの時間を過ごして来られました。好きなことも、できる事も多くある方です。ただ、学校に行かないことだけで全人格を否定されるような周りの対応に深く傷ついて来られました。

そんな彼女には手芸の趣味があり、いろんな作品も創り出していました。彼女の作品を人が見て、ミシンかけの内職の紹介がありました。新しいことを始めるにあたり、不安



相談者と職員がミシンをする様子

(記載には相談者の許可有)

が先に立ってしまいう癖があり、返事を躊躇していました。面談の折に悩みをひきセン職員に打ち明けてみました。それでは一緒にやってみましょうと写真は相談室でミシンをかけている様子です。

(吉川静)

「宮島貫太郎君と語る会に
参加しました」

貫太郎君は17歳の男性です。小学校に入った頃から何となく周りの友達から浮いている、なんか違うなと感じていたそうです。小学校4年の時にADHDと診断されてやっぱり、と言う気がしたとのこと。だから診断名が着いたことで落ち込むとかショックを受けることはなかったと振り返っていました。

周りとの違いは、当然のようにいじめの対象となりますが、彼の場合は友達より先生との摩擦が大きく、学校は苦しい世界だったそうです。その日はご両親とお兄様も一緒に参加されて家族の思いなども聴くことができました。

お兄さんの場合は、貫太郎君とは逆で、行きたくなくても、辛くても学校に行き続けました。それはその後の頑張りにも繋りプライドを保てたと語られました。(裏面へ)

(続き)おふたりとも自分で決めている、進み方を自分で選んでいると言う共通点がありました。作文は本人が中学一年の時に学校の生徒全員の前で読んで掲載しています。発達障がいであるうとなかろうとそれは大きな問題ではない、問題は周りの環境と考えるようになりました。(吉川静)

欲しくて、この作文を作り直した。

僕は、行動を起こすとまわりの人と違った考えで、注意されたり怒られたりします。わすれものをする、まともに覚えられない、言われても守れない。自分がなおせなくて、自分がきらいになって、学校にも行かなくなりました。行かないことで自分が変わるかもと思ったけど変わりませんでした。どうしようかと自分に問いましたが、返事はかえってきませんでした。なんども自分がダメと思って、自分が反省するように自分が苦になることを自分に押し付けました。友達も、自分のことをよく思わない人もいて、自分のせいで自分が嫌いになりそうでした。

学校を長い間休みました。こんな状態のままでもいいのかな、と気づくには長い時間が必要

でした。けど、学校の外にいて、自分を違う向きで見ると、自分がきらいにはなれませんでした。むしろ、よく見えました。

よく、「努力しろ」というけど、僕は努力って言葉が嫌いです。自分は努力しないで生きるのが目標なぐらいです。なぜ嫌いかというと、がんばっても治せないところを努力しろということはできないからです。自分が好きなことをすると、自然と自分が好きになります。好きなことをしている時はご飯も食べるのを忘れます。

時間がある時は、面白いことを考えるようになって、そんなことを考えている時間は最高におもしろいので、また自分が好きになりました。そういう時間を多く持てば、それでいいんだと思います。僕はダメなところがいっぱいあるけれど、勉強もできないし、忘れ物ばかりだ

けど自分なりに自分らしく生きたいと思っています。自分探しの旅とまではいかないですが、自分を見つける生き方がしたいです。それさえできれば、人生に悔いはないです。

それには、まず自分のことをわかってもらわないとだめだと思います。その為に今日話しました。自分がきらいで我慢ばかりして、自分を自由に出せない社会なんてつまらないです。そう思っているのは僕だけじゃなく、ほかにもそう思っている人はいると思います。そう思わない人もたくさんいると思います。僕はADHDです。だけど、それも含めて宮島貫太郎で、自由に生きる俺です。自分からはこんなことしか言えないけど、そのことをみなさんにもよく考えてほしいと思います。みんな、聞いてくれてありがとう。(宮島 貫太郎)